

**情報通信審議会 情報通信技術分科会 放送システム委員会
衛星放送用受信設備作業班（第4回）議事概要（案）**

1 日 時

平成29年2月1日（水） 11時00分～11時30分

2 場 所

総務省11階 1101会議室

3 議 題

- （1）前回議事概要の確認について
- （2）2.5GHz帯アドホックグループの中間報告等について
- （3）光配信アドホックグループ（仮称）構成員（案）について
- （4）その他

4 出席者（順不同、敬称略）

【構成員】 後藤主任（情報通信研究機構）、佐野（テレコムエンジニアリングセンター）、沼尻（電子情報技術産業協会）、加藤（電波技術協会）、中野（電波産業会）、杉本（日本CATV技術協会）、宇佐美（放送サービス高度化推進協会）

【事務局】 小川、糸（情報流通行政局放送技術課）

5 配付資料

資料IF作4-1 衛星放送用受信設備作業班（第3回）議事概要（案）

資料IF作4-2 2.5GHz帯アドホックグループ 中間報告

資料IF作4-3 今後の検討スケジュール（案）

資料IF作4-4 光配信アドホックグループ（仮称）構成員（案）

参考資料1 第1回作業班資料（メインテーブルのみ）

参考資料2 第2回作業班資料（同上）

参考資料3 第3回作業班資料（同上）

参考資料4 第1回2.5GHz帯アドホックグループ資料（同上）

参考資料5 第2回2.5GHz帯アドホックグループ資料（同上）

参考資料6 第3回2.5GHz帯アドホックグループ資料（同上）

6 議事概要

議事次第に沿って調査検討を行った。議事概要は以下のとおり。

(1) 前回議事概要の確認について

資料 I F 作 4 - 1 の前回議事概要（案）が承認された。

(2) 2.5GHz帯アドホックグループの中間報告等について

事務局より資料 I F 作 4 - 2 および資料 I F 作 4 - 3 に基づき説明があり、主に以下のとおりの質疑が行われた。

- 資料 I F 作 4 - 2 の 18 ページに記載されている「モデルの離隔距離」の意味を教えてほしい。（宇佐美構成員）
- 基地局高さを 40m、ブースタ設置高さを 10m で想定しており、40m 引く 10m は 30m となる。今回想定したモデルでは 30m 以上の離隔距離が確保できているという意味である。（事務局）
- 資料 I F 作 4 - 2 の 4 ページにおいて、漏洩基準（案）の -49.1dBm はスペクトルアナライザを使って測定した時の 50Ω 終端での電力という認識で合っているか。（佐野構成員）
- その通り。一般的に放送の方は 75Ω 系だが測定を行うのは 50Ω 系であるので、50Ω 受信端での電力値という理解で正しい。（後藤主任）
- 今回は共用条件ということでこの値を参考にして検討を行った訳だが、今後は実測の段になるので、その中でどういう測定環境を用意するか、どういう測定方法が適切かを議論するので、その中で提案できればと考えている。（事務局）
- 測定は多分電波暗室で行うと思うが、集合住宅や戸建の現場での測定手法も合わせて考えておく必要がある。（杉本構成員）
- ご指摘の通りである。暗室の中では測れてもフィールドでは測定限界を下回るケースも想定されるので、そういう場合にどうするかについても併せて検討をお願いしたい。（事務局）
- 資料 I F 作 4 - 2 の 15 ~ 16 ページに各ケースの周波数範囲が記載されているが、干渉計算はセンター周波数の場合について計算しているのか。（杉本構成員）
- 帯域の一番下で計算している。（事務局）
- 資料 I F 作 4 - 2 の 6 ページに今後の作業が 3 点記載されているが、これらはアドホックで行うのか。（佐野構成員）
- その通り、アドホックの作業としてお願いできればと考えている。まず測定方法の明確化であるが、今回は微弱無線局を参考にして検討を進めてきたが、各モデルについて測定環境や使用する測定機器、使用する周波数、

用意する機材等を明確化して、まず測定条件に合意していただく。それから実際の機器を用いて測定性の評価を行う作業があると考えている。それらを引き続き2.5GHz帯アドホックの中でご検討していただきたい。（事務局）

- 微弱無線局の場合は、ある周波数があつて、そこが都合悪ければ別の周波数にずらして使うこともありうる。今回はそうではなくて、使える周波数が決まってしまうていて、使う人達は自分でそこを意図して使おうとしている訳ではなくたまたまそういうシステムになっているわけで、最終的な制御がなかなか難しい。もし外でやる場合は、例えばCATVの漏洩の基準が参考になる。ただ、どこまで実行出来るかという話と、共用するためにどうすれば良いか、そこが今回検討していただいたということだと思うが、微弱でいいからいいという考え方は少し違うと思う。その辺はどう整理していくのか。（加藤構成員）
- 微弱無線局を参考にしたということであり、この値であればある程度共用の目処が見えてきたというものである。ご指摘のように、どうやって実効性を担保していくかが非常に重要だと思う。機材だけ対応していても施工が不適切な場合もあり、現実のマーケットの中でどうやって実効性を担保していくかを引き続き検討していく必要があると考える。日本CATV技術協会による施工方法等のガイドラインなどを参考にしながら、衛星放送用受信設備の場合はどういうものになるのかを提案できればと考えている。（事務局）
- 加藤構成員の意見に同意する。あくまで検討のスタート地点であり、微弱無線局と物理的に等価なものを示しているわけではない。実際上も微弱無線局の方はピーク値で設定しているが、今回の検討案では平均値での共用検討となっている。微弱無線局という言葉が独り歩きしないよう、表現上は注意する必要がある。（後藤主任）

（３）光配信アドホックグループ（仮称）構成員（案）について

事務局より資料ＩＦ作４－４に基づき説明があつた。

（４）その他

この後事務局より、次回の作業班の開催については２月７日の調査検討会との同時開催を考えており、内容については非公開の扱いとする旨連絡があつた。また、詳細については後日改めて連絡する旨連絡があつた。